絆を力に一歩ずつ

東日本大震災では，東北３県を中心に，１万８千人を超える尊い命が犠牲になった。平成26年９月時点での仙台市民の犠牲者は994名。行方不明30名。負傷者2,275名。高砂中学校区の中野地区，岡田地区では約300名の命が失われた。当時，津波の浸水による被害を受けた高砂中学校の山田和行校長先生に，復興への足取りや，今だから言える胸の内を聞いた。

高砂中学校前を流れる七北田川

1 あの日の高砂中学校

3月11日，高砂中学校では翌日に卒業式が予定されていたため，３年生は午前授業で帰宅，午後から1，2年生が体育館や教室で準備に当たっていました。その時です。長い地震でした。一時おさまったかと思ったらまた激しい揺れが襲ってきて，立っていることができません。恐怖心がどんどん増していったことだけは覚えています。地震がおさまった頃を見計らって，生徒を校庭に一時避難させました。安心する間もなく，私たちの耳に信じられないラジオのニュースが飛び込んできました。大津波警報発令でした。すぐには信じることはできませんでしたが，それが本当なら，ここ高砂中も大変なことになる。避難をしなくちゃいけない。でも，どこに避難すればいいのだろうか？とても悩みました。最終的に判断したのは，生徒全員屋上への避難指示でした。屋上に避難した生徒は，目の前の七北田川が激しく逆流していく様子を目撃しました。とても怖かったと思います。その日から高砂中は被災者の皆さんの避難所としても動き出します。ピーク時には，約1,000名もの避難住民であふれました。

2 海をまともに見ること，近付くことにさえ

自然豊かで，新しい産業の発展でにぎわう高砂地区が一瞬にして破壊されました。美しい景観の蒲生干潟はすっかり姿を消し，防潮林のクロマツ並木はほとんどが流されてしまいました。これらの光景を目にした瞬間，言葉を失うとともに，海をまともに見ること，近付くことにさえ恐ろしさを感じました。

3 復興は心から始まる

３月18日，この日を忘れることはできません。高砂中生全員の無事が確認された日です。すでに下校した生徒の安否確認ができずにいたのです。先生たちから歓声と拍手がわき起こり，絶望のニュースばかりが伝えられる中でのうれしい知らせになりました。しかし，学校再開のめどは一向に立ちません。電気が復旧したのが３月30日，水道・ガスはまだでした。大震災後の混沌とした状況下でしたが，全国各地からたくさんの激励や支援を受け，生徒と先生たちは，自分ができることに一つずつ取り組んでいきました。10月に行った文化祭は，地域・保護者の皆さんに学校にお越しいただき，少しでも笑顔と元気を取り戻してもらえるようにしました。テーマは「高中から世界に愛を～復興は心から始まる～」でした。一人一人の震災に対する思いや復興への願いが込められています。

復興への思いを伝える共同作品

4 自然と共にある人間の生き方とは

大津波のすさまじい破壊力は，私たち人間が作り上げてきた文化と財産，尊い命を容赦なく奪っていきました。自然の摂理の前で人間は，非力であることを悟らなければならないできごとでもありました。しかし，私たちはただ絶望している訳にはいきません。この大震災を体験した者として，自然への畏れを抱きつつ，自然と共にある人間の生き方について考えるきっかけにしなければならないと思います。

仙台市立高砂中学校校長（当時）　山田和行　やまだ・かずゆき

2010年４月から2013年３月まで高砂中学校長。
「中学時代は，自立への一歩を踏み出す社会との関わりを考える時期である。社会で起こっている課題や問題を受け止め，その解決のために何ができるか，これを主体的に考え自分たちでできることを実行していく。こうした経験の積み重ねが人間を大きく成長させる。」と話す。